

日本における『宝島』の発展

— 再話と再創造の世界 —

Retelling and Recreation of *Treasure Island* in Japan

佐藤 宗子

Motoko SATO

十九世紀後半のイギリス児童文学において「冒険小説の完成」⁽¹⁾とみなされるR・L・スティーヴンソン『宝島』(一八八三)は、同じ世紀のうちに日本にも移入され、以後数多くの翻訳者を得てきた。

第二次世界大戦後の日本の児童文学界においても、たとえば一九五〇年刊行開始の「岩波少年文庫」では、第I期一九三冊のうち通し番号一番を与えられている。⁽³⁾同叢書は「世界文学の宝庫」をさぐり、「少年たちへの温い愛情をモチーフとして生まれ、歳月を経てその価値を減せず、国境を越えて人に訴える、すぐれた作品」や「名だたる巨匠の作品で、少年たちにも理解し得る一面を備えたもの」などの「名作」を、「逐次、美しい日本語に移して、彼ら(注)少年少女たち)に贈りたい」との意図で発刊されたことが、「岩波少年文庫発刊に際して」からはうかがえる。すなわち、『宝島』はまさに古典的名作の代表としての地位を、ここでは与えられたわけである。

また、同年刊行開始の講談社「世界名作全集」(計一八〇冊)でも、『ああ無情』に続く二番の位置に据えられている。⁽⁴⁾この叢書が数多くの読者を獲得し「ベストセラーとな」⁽⁵⁾ったことは文学史的にも認められており、より大衆的な読物の要素を持つ作品としての側面も色濃いことがわかる。なお、同叢書収録

の高垣眸『宝島』についてはすでに検討を加えたことがあり、⁽⁶⁾そこでも高垣や大仏次郎が、同作品の再話のみならず、これに刺激を受けて海洋冒険物語を創作していることにふれた。

訳題の『宝島』は、たとえばメーテルリンク『青い鳥』やマロ『家なき子』などと同じく、一般的知名度をすでに得ているといっただろう。書籍の検索を行えば、『宝島』をすでに定着したイメージを持つ語として著作物の題名に應用している例をいくつもみつけることができる。⁽⁷⁾

その一方、『宝島』は、最近でも少年少女向文庫などで、何種類もの訳出が刊行されているにも関わらず、子どもの本をめぐる状況の中で言及されることも少なく、一般にも、「宝をとり船に乗って出かける話」という、題名からすぐに想像される大枠以上に、内容理解が浸透しているとは言いがたい。

となるとやはり、再話と再創造の作品群に注目してみるべきであろう。再話者、再創造者は、どのように主体的に変更を加えて／加えずして物語を仕立てあげたのか。それらの物語は、原作とどのような関係を持つ作品として認めうるのか。原作の抱えている何が、あるいは日本での「タブー」となったのか。日本の作者たちが共有している物語作法といったものがあるのか。以下の作品をとりあげて順次検討を加えつつ、こうした問題の解明につなげたい。

該当作品は、高垣眸『宝島』と『龍神丸』、大仏次郎『たから島』と『海の荒鷲』、「山の城水の城」、宗田理『宝島』である。書誌的事項については各節でそれぞれふれるが、再話については区別のため高垣版、大仏版、宗田版と呼ぶことにする。

二

高垣版については前述のように、すでに論をまとめたことがあるが、本論の目的に沿って、原作と対比させつつ、両者それぞれの特徴を確認しておきたい。なお、戦前の「世界名作物語」(講談社)所収の巻(一九三七)は未見だが、「少国民名作文庫」(一九四六)、「世界名作物語」(一九四八)を経た「世界名作全集」第二巻(一九五〇)を高垣版とする。⁸⁾

原作と高垣版の大きな違いは、少年期にヒスパニオオーラ号で宝島に赴き、そこでの海賊側との闘いを実際に体験したジムによる回想の手記が、「イギリス国中の血をわかつて、大評判となった「宝島」の長い物語も、ここにめでたく筆をおくことにする。」と締めくくられることからわかるような、イギリス国民にとっての叙事的作品へと、物語の枠組みそのものが変換された点である。原作でも、手記を綴るジムと一部補足をするリブジー医師以外に、語り手の存在がうかがえるところがある。扉ページのあと、作者の息子ロイド・オズボーンあての「献呈の辞」と、それにつづく「買おうか買うまいかと迷っている人に」という詩においてである。とくに後者では、本作品が「わたしの海賊たち」の物語であることを告げつつ作品への誘いこみとしているわけで、比較的よく知られている、本作成立の経緯——家庭内での地図作りを端を発し、家族への読みかきかせを通して物語がつくりあげられていった——をも思いあわせれば、『宝島』という作品が、遊びの精神に根ざして作られ、私的な楽しみとして少人数の聞き手を想定しているものであることがわかる。

高垣版では、末尾以外に、宝島上陸後、小屋に一行が立てこもった際に船長が国旗を掲げる場面で、語り手が顔をのぞかせる。「われらのイギリス国旗」「われわれの戦闘旗」「われらの国旗」といった言い方が、三ページほどの間に

何度も繰り返し、創出・挿入された。つまりは「イギリス魂」の発露ということのだが、対する海賊たちも卑小な悪党というわけではない。立派な「海賊魂」の持ち主であることは、これも高垣版の大きな特徴である、そもそもその発端として冒頭にあらたにつくられた、フランス軍艦との戦闘についての経過からも明らかである。「この物語について」で高垣が述べるように、たしかに「これですじもはっきりわか」るし、「かえってイギリスの海賊魂とでもいうようなものが」日本の読者に「はっきりとうかびあが」る。

そして、手記の語り手から一人の登場人物へと解放されたジムは、「無邪気」「健気な勇氣」「子供らしい、冒険と空想の好きな性質」をもつ少年として、とくに後半では、「頭の鋭い」「勇敢な」「利口な」「健気」「男らし」といった語、就中「利口」の語が幾度も名前に冠せられる。本人自身の語りではおおよそ示されえないであろう特性が明言されることで、ジム自身がより魅力的な少年となるし、彼の行為が単なる運の良さで好結果をもたらしたのではなく、身にそなえた美点を発揮して読者の期待にこたえていったのだ——と読みとれるものとなる。

また、自分たちの力を尽くしてかちえた宝は当然自分のもの、という考えにたつ原作と、イギリス国民のいわば代表として遠隔地にねむったままの宝——もとの出自は、奪いとられたイギリスのもの、或いは他国民のものか——をイギリスにもたらす高垣版とは、ここでも「私」と「公」の感覚の微妙な差異をみせつつも、ともに、宝の獲得自体については何らためらいをみせない。

大胆な事件の発端叙述はあるものの、宝島上陸後、ついに一行が勝利するまでの経緯は基本的に原作を踏襲していることとあわせ、高垣版については次のようにまとめることができる——これは、原作で与えられている情報を極端に逸脱することなく、しかし、根本精神とプロットがあらためられた『宝島』再話である、と。

三

高垣陣の少年小説作家としてのデビュー作となったのが、『少年倶楽部』一九二五年四月十二月号に連載された「龍神丸」⁽⁹⁾である。翌年単行本として刊行された本作は、「少年伝奇小説のエポックを創始した作品として好評を博した」⁽¹⁰⁾という。

物語は、この題名に始まり、題名に終わる、といってもよい。ときは幕末だが、そもその発端は五百年前のこと。南朝の遺臣、八幡船の首領として巨船龍神丸で遠征して集めた、村上三郎右衛門義龍の宝が、行方知れずとなった。土佐最南端の岬から三六里離れた海上にある鬮巖のどこかに、それがあるとされている。爾来五百年、宝探しが不成功のままであるのは、『宝の崇』のせいでもあるらしい。三年前には子孫の九郎右衛門が古記録から謎の紙片を発見、手下と出航したものの消息不明である。ここから、九郎右衛門と手下の四天王（木原の吉右衛門、黒潮の万右衛門、石崎の灘右衛門、切支丹の松右衛門）、さらに九郎右衛門の息子龍太郎を中心とする、宝獲得にむけての紙片と『三島海賊流秘伝』入手のせめぎあい、互いの離合集散の様子が描かれていくのが、物語の大すじとなる。そして最後は、二つとも我が手に入れ、正統な後継者となった龍太郎が、あらたに龍神丸と命名された船で土佐沖に向かうところで終わる。宝のありかは、二つをつきあわせたことすでに、「意外な場所だった事が発見せられた」のであり、もはや獲得は約束されたことだからか、それに筆は費やされない。

先にも述べたように、話の中心となるのは主要人物たちのからみあいであり、そこにいくつもの危険と隣りあわせの行動や謎の提示がみられ、ストーリー展開の妙となっている。しかも、十章と大団円の構成は、早春の土佐、万右衛門に即した叙述から始まり、晩春の長崎で続々と主要人物が登場、夏のカムチャツカ半島・オーカースキーでとらわれの身の九郎右衛門と吉右衛門に眼がむけられ、初秋の石の巻を経て、晩秋の江戸で龍太郎が奸計にだまされた後、吉右衛門と手を結び、出航後の船上で最後の対決、四天王の他の三人の死をもって、ようやく晴れやかな龍神丸の快走に至る……という具合に、場所と視点が次々

に変わっていく。一人ずつに即して考えれば、なぜあの危機をくぐりぬけえたのかとか、どうやって長崎から江戸まで来ることができたのかなど、不審の念を抱きたくなる展開が随所に見うけられる。それでも、作品を読み通していくことが困難でないのは、端的に示される季節の変化からもわかる通り、時間経過が単線進行であるわかりやすさと、正邪いずれにせよ個性的な人物群が比較的均等に登場し、それぞれの場面が独立した興味をそそるものとなっている点に拠るだろう。豪胆、あるいは奇怪さに眼を奪われる四天王に比べれば、龍太郎は正義に立脚する主人公で、普通に考えれば面白みの薄い人物になっていてもおかしくはない。だが、この少年は違う。十歳にして身分を隠し松右衛門のもとに潜入、美少女と見まがう容貌で南京手品の剣技も披露するし、高島秋帆邸へ忍び入り爆弾を盗み出しもする。江戸へ戻ればおでんの屋台もひくし、猫鮫の八兵衛が首尾よく手に入れた古記録をちゃっかり横どりし、樹上に隠す機転もきかせる。これだけの行動力あればこそ、『宝の崇』をうけることなく、正統な継承者となり得たのだと納得させられる。

『龍神丸』は、宝探し譚ではあるが、むしろ宝の正統な所持者の地位確保に至る物語——一種の貴種流離譚——というほうが妥当であろう。ただし、宝の在処を示す紙片の存在、海賊仲間の対立、少年の行動力、そして何より、本来なら悪役であるはずの人物群の個性豊かな魅力といった点で、原作『宝島』に大きな示唆を得ていることは間違いない。

どれほど大胆であろうと、△宝島の世界▽にとどまる高垣版（再話）と、刺激を受けたところから再創造してできた『龍神丸』。別の再話者兼再創造者の作品を次にとりあげること、△宝島の世界▽の境界を追究する手がかりを更に得ることにしよう。

四

大仏次郎の少年少女向け小説には時代小説のかたちをとるものが相当数ある。そのなかには、『花丸・小鳥丸』⁽¹¹⁾のような翻案もあることがよく知られている。海洋冒険物語も何作もあるが、ここでは特に『宝島』と関わる作品として『海

の「荒鷲」と「山の城水の城」をとり扱う。前者は『少年倶楽部』一九三三年一月〜十二月号に連載、三四年に単行本となっており、後者は『小学四年生』一九五八年四月号から翌年三月号、そして続けて『小学五年生』一九五九年四月号〜六〇年二月号と連載された。⁽¹²⁾以下、『海』『山』と略記する。

『海』は、『少年倶楽部』一九三三年十二月号の予告では「海の隼」と題されていた。角書は「侠勇小説」となっており、「隼」あらため「荒鷲」が、「侠勇」の象徴として選ばれた鳥であると考えてよからう。この作品の主人公は、展開上は椿新太郎少年であるが、題名にとりあげられているのは、瀬戸内海の島を拠点に、網主でもありつつ、海賊として活動する味岡太郎左衛門である。

新太郎に即してみれば、親をなくし九州から大阪のいとこをたよっての旅中、たまたま紙入れを海中に落とした老武士を気の毒に思い、潜水して拾いあげたのを味岡に見込まれ、海賊仲間にと強要されるうちに、役人をひきいれて味岡を裏切った二人に追われ、味岡の娘お節ともども捕えられ、小六や直吉、牙山和尚らの活躍で半月あまり後にようやく薩摩・山川港で一件落着、和尚に連れられ江戸への旅路に出る——という、志を立て都会に出る道中の厄介なまきこまれ事件の態をなす。彼の活躍は、冒頭の紙入れ拾得のための潜水にほぼ尽きる。あとは、逃げては見つかることを幾度か繰り返すばかりで、味岡のみならず、彼を裏切った堀や川名、あるいはそれと同腹の役人などに押さえこまれてばかりいる。新太郎の少年らしさはむしろ、正義感の強さに結集している。己が命よりも正義を尊ぶ信念の強さを持つ。ただしそれは、少年のみの特性ではない。新太郎ほど切羽つまった場面におかれぬものの、味岡の娘お節も正邪の判断力をしっかり持っているし、途中から二人は行をとともにする。つまり、少年と少女は、性質や大人との関係で基本的に同列におかれていると考えられる。

無力な少年少女のかわりに活躍する大人たちが目的とするのは、彼らの解放と悪人の捕縛である。宝探しは、彼らの任ではない。なぜなら、三千両の宝はそもそも味岡の手元にあったのであり、襲撃された味岡とともに消えた宝を、

見つけた絵図を参考に探そうとするのは、悪人たちの側なのである。

ここでは、宝そのものの価値が転倒されている。無惨なふるまいをすれば、味岡のごとく三千両ほどはわけなく手に入る。だが、そもそも宝の獲得に血道をあげること自体、正しい人間の道からはずれた行為である。それを批判的にみる少年少女が、結局一人は江戸へ修業に出、一人は島での日常の暮らしに回帰するところに、金銭への執着を忌避する意志がうかがえる。

では、これは、『宝島』を否定する物語なのか。いや、そうではない。少なくとも一つ、そしてとても重要な点が、受けつがれている。味岡太郎左衛門の人物造型が、それにあたる。

味岡は、新太郎をだまし、平然と海賊行為をし殺人も犯す一方、一途な少年の正義感を余裕をもって見守り、娘への情愛を持っている。仲間の裏切りに気付かぬうかつさの一方、いざ襲撃されれば宝を持って逃げのびる。牙山和尚とも知りあいが、常にその言に従うわけでもなく、最後は自ら行方をくらます。さまざまな矛盾しかねない要素をあわせ持ち、肉体に障害を持つ⁽¹³⁾、きわめて印象深い人物。味岡は、まぎれもない『宝島』のシルバーの後裔である。

大仏次郎は幕末の瀬戸内を背景に、海賊の侠勇を描き出そうとした。同時代とはいえ、『龍神丸』に比べれば舞台が限定されて動きが少なくみえるが、それは「伝奇性」の度合に関係したものであろう。何よりも、はっきりした悪の存在であるにも関わらず少年主人公と対立しない存在をつくりあげたところに、『海』の特徴がある。⁽¹⁴⁾

では、それから四半世紀後に発表された「山」は、どのような作品なのか。時代は戦国、季節は春、京・男山八幡で、白河中納言の息子、十三歳の百合若丸が、菊亭大納言の娘、桜姫の難儀に手をさしのべたところから話は始まる。『海』の新太郎同様、その勇気ある行為を海賊にみこまれ、明石の鬼藤太の船に乗せられてしまう。様子を目撃、不審を感じた桜姫の意をうけ、牛飼い少年小鳥丸があとをつけ、堺で百合若丸に合流、「ルソンの宝」が「水の城」に隠してある等の盗み聞いた情報を検討、二人で相談しながら船の水夫見習いをしていく。このように、二人の少年主人公はともに行動的であり、置かれた状

況に積極的に対処していく。百合若丸がより無鉄砲に近い勇敢さを、小鳥丸が知恵をそなえているが、これは望ましい少年像を相補的に示したとみてよからう。やがて瀬戸内海の小島で邪魔な役人たちを売って、船は、かつて竜神丸の乗員仲間であった鬼藤太と走島の善六（右足を失っている）の、宝獲得にむけた呉越同舟状態で外海へ出る。少年二人の味方は、本来通訳をするはずだった八たおしょうVのみ。いったんある島に上陸⁽⁶⁾、かつてスペイン人がたてた「山の城」の墓中の骸骨から鬼藤太がかぎを取り、再出航後、唐土を経てフカのいる海をわたり、トラヤ大蛇のいる地から、マンングローブの木々がジャングルを成す島にたどり着く。上陸した二少年は島にいた来島の仁吉と出会い、鬼藤太の命で「水の城」内の滝つぼをめぐり、見事宝を発見。その後、小鳥丸の機転やおしょう、仁吉の働きで逆に主導権を握った彼らが、不要な殺生を避け海賊を従え、おだやかな帰りの航海につく。

物語展開についてある程度詳しくふれたのは、「二人の少年が南方の島に行き、かくされた宝を発見する」という大枠の中身を考えようとする、否応なくある長さの説明が必要になるためである。それは、『宝島』を語ろうとするときとも共通する。即ち、「山々」は、少年主人公の複数化や訪問する島の複数化など、舞台を移しかえたこと以外の差異もあるものの、全体の物語展開のあり方としては、『海々』などと比べてはるかに『宝島』に近い作品であり、再話に近い再創造と言ってよい。とくに、二人の少年たちの行動力は原作のジムのそれに匹敵するだろう。そして設定も、彼らが力を発揮すべくつくられている。目的とする島への最初の上陸・探索者となるのも、滝つぼのむこうのへやへ穴ぐりをするのも、小柄な少年たちゆえになしえた活躍である。異郷の様子や海賊間の対立、仁吉の登場なども、『宝島』を十分にふまえた記述となっている。

その一方、「山々」の特徴的な点は、まず、少年たちの側が殺生に手を染めることを決定的に避けたことである。仁吉でさえ、おしょうの説得で鬼藤太への恨みを捨てさる。大仏の倫理観が明確に示されるところであり、小学四、五年生といった十代になりたての読者への配慮が作者・編集者双方に働いていた

ためでもある。

もう一点は、「宝」に対する登場人物の態度である。もともとはスペインの海賊船が集めた宝であり、これを我がものとしても差しつかえないように思われるが、結末では、いく分かは船に乗り組んだ働き手たちに与えられるもの、あとは、寺に老人や子どもらを住まわせる家づくりの資金として、つまりは世の中のために使おうと、何と善六が提案するのである。少年たちは、頓着しない。彼らにとっては、桜姫との再会、さらにその時点までに自分たちがたくましくなったこと、みやげ話をたくさん得たことのほうが、「海賊の宝より、値うちがあったといっただい」くらいだという。

この後者の点で、「山々」はやはり、△宝島の世界Vを微妙に逸脱しているのではない。結末を重視して見直すなら、この作品は「二人の少年が事件にまきこまれながらも持ち前の能力を生かし、さらに主体的に磨きをかけ男らしさの修業をするなかで日常では得難い体験をし、心身の成長を果たす」物語となる。

二つの再創造作品を通してみると、『宝島』に刺激をうけたとはいえず、それぞれに原作をどう生かすかの力点が大きく異なる一方、登場する少年少女の複数化、重要な脇役としての和尚の起用、そして「宝」への執着のなさが共通して浮かびあがる。では、原作にもっと寄り添った再話では、大仏はどのような注意を払っているのか。次にそれをみていこう。

五

大仏次郎による『宝島』の翻訳作品は、戦前にも刊行されているが、これは実質的には兄・野尻抱影の訳出である⁽⁷⁾。

戦後まもない一九四六年十一月号の『少年』から、大仏は「たから島」の連載を開始する。同年四月に創刊され、敗戦後の良心的児童雑誌の代表とされる『赤とんぼ』にも、雑誌を支える「赤とんぼ会」五人のうちの名をつらねており、この時期の大仏の子どもたちに寄せる期待と関心の強さがうかがえる。連載は一九四八年四月号で終了、同年八月には光文社から「世界名作」の角書を

つけ単行本となった⁽¹⁸⁾。連載一回あたりの紙面もかぎられ、雑誌のつくりからは中級の読者も想定されていることがうかがえる。そこで大仏は、どのような再話をなしたのか。

「おそろしい事件が起きました。」と語り始められる物語は、やはりジムの手記としてではなく、彼を三人称で描いてゆく。上記の物語の起点は、「黒犬」がジム一家の宿屋にやって来た時に定められる。その後の出航までの経緯も、船出後のいきさつや宝島での成り行きも、基本的には原作に沿って書き進められており、年少者向けの再話としてはよく用いられる方法である。

その中で眼をひくのは、「男らしさ」が時折評価の語として使われることだろう。たとえば宝島探検の船に乗り込むことをリブズイ先生は「男らしい仕事」とみなすし、船出はジムにとって「じつに男らしい冒険の旅」であり、島での戦闘で死んだ老人は「どこまでも男らしいりっぱなさいご」とげたとし、船長は「男らしく立ち向かう」という。船長やリブズイ先生には「りっぱ」との評価もあたえられるが、大人たち全般が「男らしさ」を基準に考え、行動している様子が示されている。

一方、ジムはといえば、「子どもごころに」決心したり考えたりしており、「大胆だというよりも、むこうみず」だが、宝獲得に至った後には「小さいけれどぼくも男らしくはたらくことができた」との思いも抱く。高垣版を思い起こせば、この大仏版のジムが、むしろ幼さゆえにまわりの大人からもめであられていることがはっきりする。

また、大仏版の終点は、宝島からの帰還途中の船上におかれる。無事帰還が確定すれば、もはや各人の宝を得ての後日譚など不要、というように。そしてジムにとっては、「船いっばいにつんだたから」よりも、前述の誇らしい満足感、つまり「小声でもいえそううれしい自信」を持ち帰れることの方が、大きな意味を持つ、と語られる。大人たちからみれば「よい子」だが「わるい子」でもあったジムが、少し大人の評価基準に近づけた——これは、「山々」の結末と通底する、少年の「成長物語」といってよいだろう。

大仏ほのちに、偕成社「児童世界文学全集」の第八巻として、『宝島／ジャングル・ブック』を訳出している（一九五九）。光文社版より紙幅の余裕があるため、章立てなどは原作に近づけたものになっている。それでも冒頭は「おそろしい事件がすぎつぎと、少年ジムの家におこりました。」とされ、このあとも光文社版をふまえた骨格ながら、さすがに終点は原作にある大団円におき直された。ただし、原作にはない、ジムのその後が付け加えられて——「ジムは、ペンボウ屋にもどって、母親と、さかんにやっています。」と。ジムがどの程度の宝をわけてもらったのかはわからない。とにかく彼は、日常に復帰した。ここでも、「宝」はジムにとって、ほとんど効力を持ち得ていない。

偕成社版では修正されているが、光文社版ではジムの周辺の大人のうち、リブズイ先生だけに語り手は敬語をつかっている。「人格というものは、これだと心から感じ」るほどりっぱなリブズイ先生。尊ばれるべきは、日常の中の「男らしさ」だ、といった意識が、大仏版の底には流れているように思う。

六

一九九七年十月から、「痛快 世界の冒険文学」全二四巻（講談社）の刊行が始まった。

一九六〇年代なかば頃から、児童文学の世界では完訳尊重の傾向がつよまり、ときに「完訳主義」と呼ぶべきほどに、再話への風あたりがきびしいものとなったことはよく知られている⁽²⁰⁾。最近では一般書の分野での「超訳」が認められていることもあってか、形式的な「完訳」のみにこだわる風潮は少ししずつ減ってきた感もある。それでも、この叢書のように、「第一線で活躍中の作家による、スピード感あふれるストーリー展開」を重視し、むしろ積極的に、「作家の豊かな創造力」の結実をうたいあげることが実現したことには、驚かされる。当然ながら『宝島』は、世界の冒険文学の代表的名作として、選ばれた。再話者は宗田理。同叢書第六巻として、一九九八年三月に刊行された⁽²¹⁾。

宗田版の最大の特徴は、少女エミーを登場人物に加えたことである。『宝島』は、つぎつぎとおこる事件にくわえて登場人物がとびぬけておもしろい⁽²²⁾。」と

いう宗田の、作品に対する「最大の不満は、少年がジムひとりだけで、あとはみんな大人ばかりだということ」であった。「少年の冒険物語なのだから、どうしても少年の仲間がほしい。そうすれば、ジムにとって、この冒険はもっともっと楽しいものになったはずだ。」そこで、少女エミーが仲間選ばれた。ここで直ちに思い浮かぶのは、大仏が再創造した二作品である。少年主人公の複数化は、大仏一人の発想にとどまらないことが証されたともいえよう。

もちろん、宗田版は原作者名も記載される再話である。「(略)『宝島』がそのために、『宝島』でなくなってしまうはいけない」「エミーが物語の異物にならないよう」にとの苦心があったと宗田はいう。一方で、原作のうち「現代の読者には退屈と思える部分はカット」しながら、あらたに書き加えられた人物——物語は、どのように仕立て直されたのか。

実際のところ、エミーの存在は原作の大きな変更につながっていない。船を見物中に居眠りするうちに出航してしまったとの登場のしかたは、ヴェルヌ『二年間の休暇』などを連想させもするが、その後の船上では調理室の手伝いとしてジムに準ずる目立たぬ乗員の一人となりお世話。ただ一点、エミーがりんごを食べたいと言ったことが、ジムの樽内での盗み聞きにつながっており、間接的ながらエミーの功績が一つつくられている。

宝島上陸後も最初はジムと行動をともししており、原作との違和感は少ない。ただ、その際、エミーもベン・ガンに会ったことが、のちにエミー主体の場面創設につながられた。つまり、とりで(小屋)を脱げた後、ヒスパニオリ号確保にまつわるエピソードはジム単独の冒険となるしかないが、ここでも、「ねえ、わたしたちもいかない? (略)」とジムの誘う役がエミーにまずふられた。さらに、ジムがベン・ガンのやぎ皮ボートに乗るところまで見届けたエミーは、その後、ベン・ガンと二人で北の入り江にうちあげられたヒスパニオリ号を確認している。原作では完全に、ジムと他の一行がいれば音信不通状態になるところを、エミーの行動を挿入させることで、事件の展開全体を見渡しやすくしているのである。

また、りんご所望や小屋脱出のちょっとした会話の挿入からも、エミーが能動的な少女であることがうかがえるが、それが無鉄砲さにつながっていることが、小屋にはいった海賊たちを夜間に単独で襲撃しようとする挿入からは読みとれる。これは同時に、エミーが無事逃げおおせるよう、あえてジムが海賊側の捕われの身で居つづける選択をするという、原作にはない合理的解釈ともなっている、それぞれの性格と二人の関係を明らかにしつつより自然な進行がはかられた巧みな場面創出である。

そして、無事に宝島から帰った後の大団円で、宗田版の語りの枠ぐみが示される。帰国後、容易に想像されるように、エミーはジムの妻になる。

ふたりは、ときどき宝島の思い出話を子どもたちに聞かせる。それがふたりにとっていちばん幸せなときだ。子どもたちから、宝島で得た最大の宝はなに? ときかかれると、ジムは迷わず、それはエミーだよと答えることにしている。

一少女投入という改変は、結局のところ、家族の中の物語られる場の回復をもたらした。もちろんそれは、原作が活字化以前の段階で楽しまれていた「場」とは違う。それでも、血なまぐささを存分にはらんだまま、回想され、家庭内で楽しめる話となりえたわけで、高垣版とは違ったかたちで枠ぐみを意識的にかえ、ある部分では原作の特徴に近づいたのが宗田版だ、ということができらるだろう。

あまりにも活発すぎる少女像は、個性的というよりは典型的の感もある。それでも、あるいはそれゆえに、宗田の方法は、「古典的名作」の再話として、妥当なものとなったと認められるだろう。

七

『宝島』に関わる三つの再話と三つの再創造の作品群を概観してきた。

いくつもの作品に共通する、「宝」獲得乃至所持へのためらいが、あらため

て問題として浮かぶ。原作では、無邪気なまでに、自己の行動の結果、報酬として、地位のある人たちを含め、実にすんなりとそれを得ていた。検討を加えてきた作品群では、高垣版をのぞいて皆、宝島行またはそれにあたる事件の展開のなかで、自身の地位回復、修業の助言者獲得、「男らしさ」練磨、日常の貴重さ確認、友人のつながり強化(含・のちの伴侶獲得)など、少年主人公の心身の変化に主眼がおかれる傾向がみられた。高垣版にしても、国家的叙事詩への枠がえが成されたからこそ、宝獲得の違和感を覚えぬという面も否めない。

これに関して、一つにはたとえ第二次大戦後の「桃太郎」再話をめぐる問題などとも思いあわせていけるだろう。他方、『日本児童文学』一九九一年十一月号で「タブーの崩壊」以後⁽²⁴⁾が特集されたときに、近代的「子ども」観が揺さぶられた後も残る「みえないタブー」の一つとして、「金銭・経済問題」がとりあげられたことにも関連する、まさにみえにくい、大人・子ども関係の反映として考えていくべきことであろう。

二人主人公の存在は、たとえばいぬいとみこが動物の双子を主人公にした作品⁽²⁵⁾を何作も世に送り、いずれも高い評価を得ていることをすぐに連想させる。あるいは、ヴェルヌ『二年間の休暇』のような集団の物語が日本の作者たちにとって受け継がれたかと対比させてみることもできよう。そのとき、きわだつ一人の少年(少女)を造型しない事情も、逆に明らかとなるだろう。

そして、今日の問題追及の眼は、おそらく、少女と少年の造型の差に、より多くむけられるだろう。『龍神丸』のお節も、宗田版のエミーも、それぞれ執筆された時代と状況を考慮すれば、つくられやすい少女たちであり、作品世界の中では違和を生じてはいない。しかし、たとえば大仏の「山の城水の城」で、身分の違う少年二人が、勇敢さと賢さをわけあったこととつながげあうとき、より多くの読者になめらかに受けとられる少女像の中身が、気になってくる。ここではこれ以上ふれないが、再話・再創造におけるジェンダーの問題として、提起はしておきたい。

ここで冒頭で掲げたいいくつかの問いに対し、さらに、多少の総括的答えをしっておこう。再話者、再創造者たちは、一作品ごとに、意識的に、変更を加える

ところや原作を利用するところを選びとっている。ただし、概していえば、時間継起順に語る方法をとることが圧倒的に多く、また日本を舞台にした作品では四季の巡りに言及することが効果的である(春に事件が始まることも多い)。「龍神丸」から宗田版までには七十年以上の年月が経っているにも関わらず、「宝」に対する忌避感や「少年」イメージ、「少女」イメージにはいくつかの作で通底するところもみられる。

さて、『宝島』は、では現在の日本の児童文学状況の中で、どのような意味をもちうるのか。宗田版の収録されている叢書の編集委員の一人、神宮輝夫は、シリーズ刊行によせて『図書新聞』一九九八年一月二四日付に掲載した文章を、次のようにしめくくっている。

「痛快 世界の冒険文学」は、外国作品の場合、完訳どころか、抄訳ですらない。原作を素材にした新しい作品と考えた方がよいものもある。それではよいのかと言う前に、とにかく読者を今の濃密な「日常性」から引っ張り出さなくてはならない。

△宝島の世界▽が、いったんの「日常性」からの逸脱を主眼とする冒険第一であるとすれば、とりあげた作品群はいずれも、一応それを満たしているといえよう。むしろ、どうしても訳注を多く入れざるをえない、また宗田版ではなくに顕著に刈りこまれた、出航までのいきさつをすべて訳出せざるをえない完訳に比べ、再話や再創造の作品が、△宝島の世界▽をより印象深く築きあげることも可能だろう。

二〇〇〇年六月には、刊行から半世紀を経た「岩波少年文庫」が「新版」にかたちをかえた。あらたに各巻末に付されることになった「岩波少年文庫創刊五〇年——新版の発足に際して」では、読書が「意識して習得すべき生活技術の一つでもある」と明記されている点が眼をひく。

神宮の主張と、岩波少年文庫の認識のあいだで、『宝島』は今後、さらに、どのように日本での発展をなしうるのか。これまでの広がりやさらに追究して

いきながら、注目していくこととしたい。

〈注〉

- (1) 瀬田貞二ほか『英米児童文学史』、研究社、一九七一年。
- (2) 宮井安吉訳「新作たから島」、『文芸倶楽部』一八九五年一、三、四月連載。
- (3) 佐々木直次郎訳『宝島』、一九五〇年。なお、第二期になって訳者・画家を変更し、阿部知二訳『宝島』(一九六七)となる。
- (4) 実際には池田宣政『ああ無情』、高垣眸『宝島』、野村愛正『巖窟王』は一九五〇年六月に三冊同時刊行。
- (5) 日本児童文学学会編『児童文学事典』(東京書籍、一九八八)の「世界名作全集」の項(執筆二穴戸寛)による。
- (6) 小論「高垣眸『宝島』再話の挑戦——プロット再生の可能性——」、『千葉大学教育学部研究紀要』第四八巻Ⅱ、二〇〇〇年。
- (7) インターネットの本の検索サイト、たとえば〈books.or.jp〉などを参照のこと。
- (8) ただし、以下のテキストを含め、引用に際しては新漢字に統一する。
- (9) ここでは『龍神丸／豹の眼』(大衆文学館)〈講談社、一九九七〉を参照した。
- (10) 高橋康雄「痛快なテンポの背景」(解説)、同右所収。
- (11) 『少年倶楽部』一九三九年一月〜十二月号連載。マーク・トウェイン『王子と乞食』が下敷きとされている。なお、この作品についてはたとえば相川美恵子「花丸・小鳥丸」(大佛次郎・著)論——一九三九年、ヒロイズムからの自由」(中部子ども文化研究会編『研究「子どもと文化」』第四号、ガリバー出版部、一九九五)などの論考がある。
- (12) 『海の荒鷲』についてここでは「少年倶楽部文庫」第一四巻(講談社、一九七六)を参照した。
- (13) 『宝島』のジョン・シルバーは海戦の負傷で片足となったとされるが、
- (14) 相川美恵子「大佛次郎の少年少女向け時代小説におけるヒーロー像の変化——再生される批判力——」(『児童文学研究』第二八号、日本児童文学学会、一九九五)は、「毅然たる意志の力を發揮する」「不死身」「権力に対して一歩も退かない」の三点から味岡への英雄性付与をみ、さらに、「離脱者としての側面」にも注目している。
- (15) 『海』も、関門海峡の春から書きおこされ、菜の花咲く風景からかえでの若葉、ふじの花をめぐる季節を経て、山川港で「ほんとうの夏」を迎えつつ終結している。
- (16) 設定されている時代とはあわないが、台湾が念頭におかれているように思われる。台南には十七世紀にオランダ人によって建てられ、鄭成功のちに落城させたゼーランジャ城などがある。
- (17) 「世界大衆文学全集」第一八巻に、大仏の本名の野尻清彦名義での訳として『宝島他三篇』が収録されている(改造社、一九二八)。なお、現在恒文社から刊行されている『宝島』(一九九七)は大佛次郎訳となっているが、「再刊に際して」と題した文中で、野尻政子が実際の訳者についてふれている。
- (18) 連載中の一九四七年八・九月号が合併号のため、全一七回となる。なお、雑誌連載のうち一九四六年十一月号と四七年一月号は未見。ここでは単行本を参照した。
- (19) 一回が六、七ページだが、奥付やその他の記事と入れこみの部分もあり、挿絵も多少は入るため、分量は決して多くない。
- (20) 『週刊読書人』が一九六九年にコラム「現代児童文学の争点」を二九回にわたり連載したときには、「完訳主義」是か非か」も争点の一つとしてとりあげられ、福島正実といぬいとみこが一回ずつ執筆をしている(それぞれ六月二日、六月九日)。
- (21) 同叢書刊行開始時の宣伝パンフレットによる。
- (22) 奥付では、「筆者 宗田理」とされる。執筆者紹介では「筆者」「画家」

「原作者」がならぶかたのだが、カバー、本体とも、背や表紙、扉では、「宗田理（字サイズが大きい）◎文」となり、その下に「原作◎R・L・ステイブソン」と記されている。

(23) 以下、引用は宗田版の「あとがき」による。

(24) 鳥越信『桃太郎の運命』（日本放送出版協会、一九八三）など参照のこと。

(25) たとえば『ながいながいペンギンの話』（一九五七、宝文館）など。

* 本稿の骨子は、日本比較文学会第三八回東京支部大会（於・青山学院大学、二〇〇〇年十月二一日（土））で発表した。

* 本稿は、平成十二年度科学研究費基盤研究(C)②「近代日本の翻訳・再話と読者意識——児童文学への変容を中心に——」の研究成果の一部をまとめたものである。